
出来損ない騎士と老いぼれ騎士物語

川島徹也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

出来損ない騎士と老いぼれ騎士物語

【Nコード】

N7951A

【作者名】

川島徹也

【あらすじ】

若いだけがとりえの半人前騎士とベテランと言えば聞えがいい頑固な気質の老いぼれ騎士の物語です。

第零話

ゴンゾール国。

東大陸のほぼ西端に位置する大国だ。

はるか西方の大国や南方のセレス公国から度々侵略を受ける事があつたが、全て跳ね除ける事が出来るほどの軍事大国でもあつた。侵略を受ける事があつても国が揺るがなかったのは、代々の賢王の善政と歴戦の猛者達の活躍によるところが大きかった。

聖暦一〇八〇年。当時の国王に次ぐ権力を持つ国民議会。

その防衛部門の長官によって引き起こされたクーデターが起こされた。

国王は暗殺、議会は解散され、政治の決定力を自身に集中させ独裁政治を行った。

国民のことを考えない独裁者に怒りをなした国民の中には解放軍として立ち上がる者もいたのだが……。

圧倒的な力を持つ独裁者を前に勇敢な戦士達は次々に倒れていった。

国民達は半ばあきらめていた。もう平和な時代は訪れないと……。しかし、同年の冬に大きな変動が起きた。

ゴンゾール国北部地方と東部地方の独立である。

この二国の独立により解放軍の活動は活発化、ついには独裁者を倒す事に成功した。

やがて、行方不明だった先王の息子が帰国。そして空席だった王位を継承した。

こうして平和が訪れたのであつた。

そして今回の物語は独立を果たした東ゴンゾール国に生きる二人の騎士の物語である。

第一話 遺跡編 前編

聖暦 一〇八三年 春 東ゴンゾール国郊外の遺跡内部

男の正面には巨大な扉がそそり立っていた。

その途方もなく大きな扉は、まるで来るもの全てを拒んでいるかのように重たかった。

扉の前には一人の男が腕組みをして立っていた。

鉄製の鎧を身に着け、腰には飾り気のない長剣が携えられている。

この男の名をグードリツヒと言う。

東ゴンゾール国警備兵団に所属している騎士である。

中肉中背で特にこれといった特徴はなく、良い意味でも悪い意味でも平均的ということだ。

「押しても開かない。引こうにも取っ手が無い。一体どうすればいいんだ」

グードリツヒはかれこれ扉に拒まれ続けて十分近くが経過していた。

「ここまでは順調だったのになあ」

頼りなくため息をつきながら言った。

「まったく面倒な事になったのう」

突然男がもう一人の男が現れた。

「マベラスさん。どうでしたか」

「だめじゃ。他には入れそうなどころはなかった」

マベラスと呼ばれた男は言った。

この男もグードリツヒと同様に警備兵団に所属する騎士だ。

鉄製の鎧ではなく、レザーアーマーを着込んでいる。

グードリツヒと比べると小柄で、身長は並の女性より低い。

さらに両腕は細く、とても華奢で戦場に立つ人間には見えなかった。

しかし彼がひとたび剣を抜けば、並みの一般兵なら五人同時にしても負けはしないそうだ。

だが、騎士としては高齢で、今年で五十七になるそうだ。

「攻城兵器でも持って来るべきじゃったかのう」

「破壊槌をですか。あんなもの二人じゃ持ち運べませんよ」

「そうじゃな」

静かな遺跡に二人の笑い声が響く。

そしてひとしきり笑うとすぐに二人はまじめな表情に戻った。

「でもどうしましょうか」

まじまじと扉を眺める二人。

マベラスは扉の正面まで来るとそつと扉の表面をなぞった。

扉に施された幾何学模様の彫刻はまるで芸術作品のようだ。

「少々惜しい気がするが、ぶつ壊すしかあるまい」

マベラスはそう言うのと腰に帯びている片手剣に手を掛ける。

「ぶつ壊す？その剣ですか」

「そうじゃよ。それよりわしから離れろ」

「そんな無茶ですよ。剣で扉が壊せたら苦労しませんよ」

嘲笑うかのようにグードリツヒは言った。

するとマベラスはむっとした顔になり有無も言わさぬ口調でこう言った。

「早く離れろ」

マベラスの迫力に気おされ、言われたとおりにするグードリツヒ。グードリツヒが離れたのを確認すると、手を掛けていた剣を抜き放った。

そしてなにやら小言で呟き始める。

「我が剣に宿りし大いなる力よ、今こそその力を解放し己が刀身に宿らせよ」

そう唱えると、刀身は赤い光を放ち、数歩離れているグードリツヒにも感じられるほどの熱を放ち始めた。

そしてその光は徐々に燃え盛る火炎にその姿を変えていった。

「てやあー」

気合のこもった声とともに燃え盛る炎の刃が巨大な扉に向って振り下ろされた。

「マベラスさん。こんな事ができるんだったら最初からこうすればよかったじゃないですか」

「簡単に言わんでくれ。結構身体に負担が掛かるんじゃない」
確かにマベラスは少し呼吸が乱れている。

二人の前の巨大な扉には、ちょうど人が一人通れるぐらいの穴が開いていた。

鉄製の扉は鋳型に流し込む前の溶けた鉄のように真っ赤だ。

「でもこれはもうやらないほうがいいですね」

「そうじゃな」

扉に穴を開けてからもう十分近く経過したが、まったく冷める気配はなく触れるどころか近寄る事すらできなかった。

「まあ、しばらくの間は休憩するしかないのう」

そういうとマベラスはその場に腰を下ろした。

グードリツヒは少し躊躇したものの最終的にはマベラスと同様に腰を下ろした。

「この中に何かあるんでしょうかね」

グードリツヒが呟くように言った

「さあな。入ってみないことには分らんよ」

第一話 遺跡編 後編

結局二人が扉をくぐる事ができるようになったのはそれからさらに数十分後だった。

真つ赤だった扉も今では冷えて固まっている。

「先に入りますよ」

「気をつけるよ」

「分ってますよ」

グードリツヒはランタンを片手にと熔けた扉をくぐりその後をマベラスが追う。

「真つ暗じゃなあ」

「そうですね」

部屋の中はランタンの明かりでは照らしきれておらず、漆黒の闇が広がっていた。

グードリツヒは背負い袋から松明を数本取り出すとランタンの火で松明に火をつけ、部屋の隅のほうに投げ置いた。

すると真つ暗だった部屋は少しだけ明るくなった。

「何もありませんね」

「この部屋のはずなんじゃが……」

マベラスは羊皮紙の地図も見ながら言う。

地図を頼りに遺跡の最深部に来たのだが、目的の物はまだ見つかっていない。

二人が捜し求めている物、それは剣だ。

中央、北、東の三つのゴンゾール国がまだひとつだった頃。数多の敵を退けてきた將軍がいた。

彼は戦いが起こるたびに常に前線で戦い勝利し続けてきた。民衆はその強さと愛国心に敬意を評し祖国の英雄と呼んだ。祖国の英雄にして無敵の強さを誇った男。將軍エノク。

そんな彼が三年前突然亡くなった。

防衛長官の罾にはめられ、クーデター最初の被害者となったのだ。
しかしどのような経緯で殺害されたのか知る者はおらず、詳細は闇の中である。

彼の装備品は遺体とともに彼の親族に引き取られたのだが、剣だけが見つかっていなかった。

一応調査団が派遣され一通りは調べられたのだが発見されなかったのだ。

その後調査は三国が独立するとともに調査は打ち切りと発表した。將軍の親族達は中央ゴンゾール国に仕える武官の一族なので、東ゴンゾール国に入る事は外交上の問題から入国する事は難しかった。そこで二人の出番である。將軍の親族とは顔見知りで、將軍の剣の調査を私的に依頼されたのだ。

「マベラスさん。これって何でしょうか？」

部屋の奥の方がグードリツヒが呼んでいる。

「何か見つけたのか」

「はい。これです」

グードリツヒはマベラスに布に包まれた何かを差し出した。

丁寧に布の包みから取り出すと一本の剣があった。

「この剣は……」

独特な装飾が施された鞘から剣を引き抜いた。

「間違いない。將軍の愛剣、“ペインキラー”だ」

魔力を帯びた希少金属“ミスリル”から作られたその剣は、淡く光を放っている。

「軽いな。私の剣より軽い」

マベラスは自分の愛剣と持ち比べていた。

マベラスの剣もミスリル製の剣で、かなりの業物なのだが、將軍の剣はさらに上の行くのだ。

將軍の剣は数百年前の古代王朝時代の有名な付与魔術師の手によって作り出されたのだ。

この時代の魔術師が魔力を付与した剣ほぼ永久的に使う事ができ

る上に、に何かしらの特殊能力が付与されている事が多いのだ。

「この剣、いくらぐらいするんでしょうね」

グードリツヒがぼそつと呟く。

「小さな城なら余裕で買えるだろうな」

「そんなにするんですか！」

「あくまで予想だがな。でもわしの剣だって郊外に庭付きの家が変えるぐらいの値はするぞ」

「そうなんですか……」

グードリツヒは自分の剣を見つめながら言った。

「まあ、お前の剣だって悪くはないぞ」

「でも……」

「自分の剣を信じるんじゃ」

マベラスがそう言うのと、グードリツヒは渋々だが頷くのであった。しかし、正直なところグードリツヒの剣は二つの剣とは違い鉄製の剣だ。

それでも、かなり上質な剣には違いないのだが、二つの剣と比べると見劣りしてしまう。

「さて、帰るぞ」

マベラスは將軍の剣を鞘に戻し自分の愛剣の一緒に腰にさす。

「もう帰るんですか」

「物も見つかつたし、早く帰ってまともな飯が食いたい」

確かに最近は硬い乾パンや香りの悪い干し肉しか食べておらず、町育ちの二人にはもう我慢の限界で胃の方も受け付けなくなっている。それに水ではなくエールやワインが飲みたい。

「そうですね。早く帰りましょう」

グードリツヒはきびすを返し扉のほうへ向った。

「しばし待たれよ」

突然後ろから声が聞こえた。

「マベラスさん。呼びました？」

振り返るグードリツヒ。

「いいや。わしじゃないぞ」

「じゃあ誰なんでしょうかねえ？」

グードリツヒは首をかしげる。

「誰じゃ。わしらを引き止めるのは」

マベラスは部屋のさらに奥のほうに向って叫んだ。

「我は封印されし知識と技術の守護者なり」

「もしや……ガーゴイルか」

「そう呼ぶ者もいる」

その言葉に二人は一瞬凍った。だが次の瞬間には冷静さを取り戻し二人とも剣を抜く。

「汝らは我らの領域に踏み入った。主の命により汝らを殺さなくてはならぬ」

そして暗がりの奥のほうで大きく羽ばたく音。

「グードリツヒお前は下がっている」

グードリツヒは一步下がり剣を構える。

マベラスはガーゴイルに向かって切りかかっていた。

「てやあああ」

マベラスは相手を威嚇するように咆哮すると、大きく跳躍し飛びたとうとしているガーゴイルに向って一閃を放つ。

ガーゴイルはあわてて避けようとするのだが、間に合うはずはなかった。

右の翼を捉えガーゴイルは低く唸る。

怒りと憎しみの目で睨みつけると鋭い鉤爪を振りかざす。

それをマベラスは軽やかに宙返りでかわす。

「危ない」

グードリツヒは叫ぶのだがマベラスはまったく気にした様子もない。

ガーゴイルは大きく口を開く、それを見たマベラスは大きく横に跳躍した。

燃え盛る火炎はマベラスが先程までいた場所を黒く焦がす。

「まったく、わしはウェルダンよりレアのほうが好きなんじゃが」
そういつて短く笑う。

「汝はステーキがお好きか、我は生肉の方が好きである」
そう言つてマベラスを鋭い牙で噛み砕こうとする。

「随分とお喋りなガーゴイルだ」

牙を剣で受け止める。

「生意気な奴にはこうじゃ」

マベラスは飛び退りながら、左足の投擲用の短剣を取出して投げつけた。

短剣は真っ直ぐ飛び、狙いたがわずガーゴイルの口の中に入った。
悲鳴のような咆哮を上げるガーゴイル。

「口は災いの元じゃ」

さらに大きく後ろに跳躍すると、グードリツヒに向つて叫んだ

「はい！」

マベラスは後方で呪文の詠唱を始めた。

グードリツヒはすぐさまガーゴイルに向つて駆け出した。

まだガーゴイルはまだひるんでいるようだった。

グードリツヒは真っ直ぐ正面に突き出すと勢いを生かして突きを
繰り出した。

確かな手ごたえがあり、ガーゴイルの胸に深々と剣が突き刺さつた。

そして次なる一撃を放とうと剣の引き抜こうとした。しかし……。
剣を抜く事ができなかった。深く刺さりすぎたのである。

その一瞬の隙をガーゴイルは見逃さなかった。

激しい憎悪のこもった鉤爪の一撃がグードリツヒを襲う。

「ぐはっ」

あまりの衝撃に息ができなくなり、口の中は血の味がする。

鎧が見事に裂けている。皮膚が切れていないところを見ると直接的な傷はないようだ。

「あともう少し、もう少しなんだ。頑張れ自分」

自分で自分を励ますと、立ち上がりガーゴイルと対峙する。

「さて、どうしようかな」

もう攻撃手段が残っていなかった。剣は怪物の胸に突き刺さったままだし、マベラスはまだ呪文の詠唱中だった。

「素手よりはマシかな」

棟的用の短剣を両手に一本ずつ持ち、構えた。

グードリツヒはガーゴイルを睨みつけた。

ガーゴイルもまたグードリツヒを睨みつける。

「結構目つき悪いんですね。そこら辺のごろつきよりよっぽど迫力があります」

グードリツヒは動かない。

ガーゴイルもまた動かない。

男と怪物のにらみ合いがしばらく続く……。

そしてその均衡や破られた。

「グードリツヒご苦労だった。もういいぞ」

グードリツヒはその言葉を聞きすぐにマベラスに前線を譲った。

マベラスはいつの間にか長い呪文の詠唱を終えていたのだ。

「さあ、我が刃受けてみよ」

真紅の光を放つ愛剣を天に掲げながら、芝居がかった口調で言う。

「俊足のマベラス、参る」

マベラスはガーゴイルに向って駆け出した。風のように。

すれ違いざまに一撃を放つ。

何かが地面に落ちる音。ガーゴイルの右の翼だ。

目にも止まらぬ速さで次なる一撃を繰り出す。

次は左の翼だ。

ガーゴイルは反応することすらできない。グードリツヒも目で追うのが精一杯だ。

無駄のない動きでガーゴイルを次々と切り刻んでゆく。まるでそれは一種の舞いのようなだ。

見るもの全てを虜にするようなその舞……。

気が付くとガーゴイルは死んでいた。

剣を一振りし異物を払い落とすと剣を鞘に戻し、きびすを返してこちらに戻ってきた。

「ちよつと無理しすぎたかもしれんな」

「そうですね」

マベラスの両腕は火傷で赤く腫れ、全身傷だらけで出血もしていた。

グードリツヒ外傷こそ少ないものの、鎧は真っ二つに裂けていたし、剣もひしゃげて使い物にならなかった。

「でも、死ななかつただけマシですね」

「さすがにガーゴイル相手じゃきつかったな」

「今度こそ帰りましょう」

「そうじゃな」

こうして二人は遺跡から去った。

第一話 遺跡編 解説

ここでは第一話に出てきた単語ないし用語について説明しようと思います。

聖暦 この世界が神々によって創設された年を元年とした暦の事です。

警備兵団 東ゴンゾール国独自の警備部隊。国の正規軍なのだが、基本的に国から独立していて、国に仕える騎士と言うより国に雇われた傭兵に近いです。よって軍事活動に用いられる事もほとんどありません。もともと軍事活動自体が少ないのですか。

騎士にしては高齢 現代日本では平均年齢は七十代後半ですが、この世界では医療技術が未発達なので、一般市民の平均寿命は五十代後半です。豪商や貴族、王族は比較的環境が恵まれている為六十代の後半ぐらいです。しかし、魔術師の中には百歳を超える者もいます。一応人間としての種の限界寿命は百歳前後だと考えられています。

中央、北、東の三つのゴンゾール国 聖暦〇八〇年にクーデターが引き起こされ、期独裁政治が行われました。多大な軍事を背景に統治を行ってきたので、真正面から抵抗活動を行っても解放軍に勝ち目はなかったため、比較的影響力の弱かった東部地方と北部地方の独立から解放を開始しました。独立が成功すると、その勢いに乗じて一気に独裁者の暗殺までこぎつける事に成功し、そのあと殺害された先王の息子が帰国し、独裁政治は終わりを告げました。その後北部地方と東部地方の独立と自治を認めたので、元々一つだったゴンゾール国は中央ゴンゾール国、北ゴンゾール国、東ゴンゾール

国の三つの国に分かれたのです。

ミスリル 魔力を帯びた希少金属で、産出量も少なく、同量の金より高値で取引されます。かなり強固な金属で加工は困難ですが、魔力を用いて武器や防具にすると優れた性能を持った物が出来上がります。しかもミスリルは錆びたり色あせたりしない為、かなり長持ちします。また、魔力を付与すれば半永久的に使う事が出来ます。

ペインキラー エノク將軍が保持していた事で有名なミスリル製の剣で形状はブロードソードに近く、古代王朝時代中期の付与魔術“灼熱のバーバス”によって作られた。どのような魔力が秘められているのかは不明です。

ガーゴイル 魔法によって生命と知性を与えられた魔法生物の一種です。外見は石像と非常に似ていて、目をつぶってじっとしているとまず見分けはつきません。背中には翼が生えていて低空を飛ぶ事が出来ます。鋭い鉤で主に攻撃しますが、牙や尻尾などを使う事もあります。また、口からは炎を吐くことが出来ますが、相当疲れるらしいので吐く事はほとんどありません。ガーゴイルは石で作られることが多いのですが、その他にも鉛や鉄、銅など様々な金属で作られています。中でも魔力を帯びたミスリルで作られたものはかなり強く、並みの戦士では相手になりません。ちなみに今回二人が戦ったのはミスリル製のものです。

第二話 山編 前編

夕暮れ時の寂れた酒場のカウンター席に一人の男がいた。

まだ日も落ちていないのにその男は酔いつぶれているようだった。

「マベラスの旦那。もうやめましようよ」

酒場の店主はカウンターに突っ伏しているマベラスに言った。

「まだじゃ。まだわしは飲めるぞ」

マベラスは突っ伏したまま呟く。

右手には空のジョッキががちりと握られている。

「旦那、体のこと少しは気遣いなさいな」

「ほっとけ。もう一杯だ」

マベラスはジョッキを掲げる。

「分りましたよ」

マベラスの顔は真っ赤だ。というか全身真っ赤で、限界を超えつつあることは誰の目にも明らかだった。

しかし酒場の店主はマベラスの頑固な気質を知っていたので、渋々ジョッキにエールを注いだ。

「おう、あんがとよ」

マベラスは一言そう言うと、カウンターに突っ伏してそのまま動かなくなった。

「まったく、営業妨害もいいところだぜ」

店主の独り言が誰もいない酒場に響いていた。

鳥のさえずりが聞こえる。

目を開けると、カーテンの隙間から朝日が差し込んでいるのが見える。

さわやかな朝なのにも関わらず頭が痛かった。

「二日酔いなんて情けない。わしも歳をとったかのう」

ベッドから上半身だけ起こし自室を見回す。

散らかっていたはずの部屋はきれいに掃除され、テーブルの上には水差しとコップが置かれていた。

「グードリッヒの奴か……」

半人前の後輩の名を呟くと、立ち上がりベッドの脇の水差しに手をのばした。

そしてぐつとそれを飲み干す。

一晩置いてあったので、かなりぬるかったがそれでも目はいくらか覚めた。

「とりあえず、飯だな」

マベラスはベッド脇の剣を帯刀すると、朝食をとるべく部屋を後にした。

「よう、マベラスさんのご登場よ」

先日の酒場の扉を勢いよく開ける。

「らっしやい」

がらんとした店の中に店主の威勢のいい声が響く。

そして定位置のカウンター席の右端に腰を下ろす。

「いつもの」

店主は返事すると奥の厨房に消えていった。

そしてしばらくすると料理を持って戻ってきた。

サラダとジャムパンのセット。マベラスお気に入りの朝食だ。

「そういえば、いつもの若いのがいないですね。どうしたんです」

「さあな、分らんよ。もう来てるかと思ったんじゃないが」

「まだ店には来てないよ」

「そうか」

そう言つと、ジャムパンを口の中に放り込んだ。

「旦那」

「なんだ」

「噂をすれば何とやらつてやつた」

酒場の扉が開かれグードリツヒが入ってきた。

グードリツヒは手前のほうのテーブルに腰を下ろしたが、マベラスを見つけると立ち上がりカウンターのほうにやって来た。

「おはようございます」

「うむ。おはよう」

挨拶の言葉を交わすと、グードリツヒは朝食のパンを頼んだ。

そして出されたパンを小さくちぎって食べ始めた。

「それだけで足りるのか？」

サラダを口に運びながらマベラスは言う。

「足りるわけ無いじゃないですか。スープもサラダもポテトも欲しいんですよ」

小さなパンをかじりながら言った。

「じゃあ、頼めばいいじゃろう。旦那追加だ」

「いいんです。これでいいです」

慌てて注文を阻止するグードリツヒ。

「なんで頼まないんじゃない」

「お金がないんですよ」

小さく呟くように言った。

「お金がないはずないだろう。この前報酬が出たじゃろう」

この前の遺跡の搜索でそれなりの報酬が出ており、しばらくの間は多少贅沢をしても問題はないはずである。それなのにお金がないというのもどこか変な話だった。

「剣と鎧の新調にお金がかかったんですよ」

さらに小さな声で言った。

「そうか。それで買ったのか」

「鎧は新調できたのですが、剣は少々厳しいかもしれません」

グードリツヒはため息をつきながら言った。

「ふびんな話ですねえ」

酒場の旦那は黙って温かいスープをグードリツヒに差し出した。

「これは……」

「私からのおごりだよ。味わって食べな」

「ありがとうございます」

目に薄っすらと涙を浮かべながら言った。

目も止まらぬ速さでスープを口に運ぶ。

「若い騎士さんよう。そこまでお金がないのか」

グードリツヒは黙って頷く。

「日頃から貯金しておかないのが悪いんじゃないよ」

「マベラスさんだって、報酬や恩賞が出るたびに大酒飲んでほとんど使い果たしちゃうじゃないですか」

マベラスはグードリツヒの鋭い指摘に何も言い返せなかった。

「まあ、旦那が大量に酒を飲んでくれればこっちも生活が潤うから構わないけど、動けなくなるまで飲むのはやめて欲しいねえ」

「そうですよ。昨日だって大変だったんですから」

「すまん」

マベラスは首の後ろのあたりをぼりぼりと搔きながら謝った。

昨日酔いつぶれたあと、グードリツヒが引き取りに来るまでマベラスは店のど真ん中でいびきをかきながら大の字で寝ていたのだ。

自覚があれば問題が無いのだが、まったく悔い改めようとしなのがマベラスの悪い所だ。

「潤うのは財布の中だけでいいからな。どうか今度は目頭まで潤す事のないようにしてくれよ」

旦那がそう言うのとグードリツヒは笑っていた。マベラスはただ謝り続けるのであった。

「それはさておきグードリツヒさんよう」

「なんです」

「金がないんだろ。小遣い稼ぎ程度にしかないがちょっとした仕事をやらないか」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7951a/>

出来損ない騎士と老いぼれ騎士物語

2010年10月10日16時51分発行